

気づいたら

11月... 今年はまだ1/6残ってる。

「なぜ働いていると本が読めなくなるのか」

前半は、明治から「読書」がどういう変遷をたどったか、という話。

それぞれの時代背景の中で、どういう人達がどういう本を、どう読んでいたか、が整理されている。

明治の「西国立志伝」から大正の親鸞ブームへの変遷や、

大正末期の「痴人の愛」や1960年代の司馬遼太郎ブーム、

その後の「窓ぎわのトットちゃん」「ノルウェイの森」「サラダ記念日」、

1980年代の吉本ばななや山田詠美、などなど、

その時々々の社会の人々の働き方や暮らしを踏まえて考察されていて、

なぜ読めなくなるかについて考える準備として、働くことと読書についてまとめている、と。

ここでは取りあげられてなかったけど、最近の「なるう系」も同じように見えるなあ、とか。

途中、出版業界の事情も踏まえた「円本」の話にも、なるほどなあ、と。

後半以降は、題名の「なぜ働いていると本が読めなくなるのか」の回収。

- ・ 情報 = 知りたいこと
- ・ 知識 = ノイズ + 知りたいこと、

とした上で、

ノイズのないスマホゲームやファスト教養には手がのばせても、

新しい文脈に出逢う可能性がある読書には、偶発的なノイズがあって余裕が必要、と。

明治から戦後は「社会に関する知識」が、現代では「自分に関する行動」が必要とされ、

だから、過去においては「社会に関する知識」を得るための読書が労働にも関係していた。

一方で、現代ではそうではないので、読書は余暇でしか楽しめない、

逆に言うと余暇がないと読書ができない、と。

で、その解決のために半分で働く半身社会を目指しませんか、というのが最後の主張。

最後の主張にはだいぶ駆け足感じがあって、割と最近良く聞く主張に落としたなあ、と、

賛否いりじまった読後感。

途中、参考文献に挙げられていた「本の百年史 - ベスト・セラーの今昔」は、

1965年出版の百年史... どんなものだろう読んでみよう。